

国語科教育における「音節」の的確な理解に向けて

Toward a correct understanding of syllable in Japanese language education

福盛貴弘

FUKUMORI Takahiro

Key words: 音節、モーラ、拍、国語科教育、音節しりとり

1. 序

主に母音を中心として前後に子音を伴った音のまとまりに対する分節単位として音節がある。この音節という用語は国語科においても英語科においても使用されている。しかし、国語科においては音節に対して的確な説明がなされているとは言えない現状がある。まずは、この点を確認するために、中学校の教科書における説明の一例を確認する。

仮名一字で表される音のほとんどは、子音と母音の組み合わせでできています。これを音節といいます。私たちが音^{おん}を聞くとき、音節として聞きとることはありますが、子音だけを取り出して聞いたりすることは、まずありません。音節は、そういう意味で基本的な単位だといえます。(中略)

また、日本語の音節が「子音+母音」でできているのに対し、英語や朝鮮語などでは、音節は、「子音+母音+子音」が基本的な構成になっています。

「日本語の音声」『伝え合う言葉 中学国語1』
教育出版(平成24年版)

この教科書では、新学習指導要領・生きる力の国語科における中学1年で示された「音声の働きや仕組みについて関心を持ち、理解を深めること」という項目に対し、最も真摯に取り組み、平易に分かる表現で説明がなされている¹。仮に、教育現場においてこの教科書が採択され、カリキュラムの中に取り入れられて授業で教えられていたとしたら、基本的なことは理解できていることに

¹ 中学校1年生の国語科教科書における説明のまとめは堀畑正臣(2016)が詳しく、取りあげられている教科書でも音節とモーラの違いを説明できていないことが確認できる。

なる。ただし、必ずしもそうであるとは限らない。複数の要因が考えられるが、読み書きに偏重して音声に関する項目を取り上げようとしない、一応は教えるけれども音節に関する十分な知識を教師が擁していない、といったものが主な要因であろう。結果として、音節については、国語科より英語科において的確な説明がなされることが多い。そして、英語に関する音節の知識は得ることができても、母語である日本語の音節についての的確に理解をしている者が少ないというのが現状である²。この点は、音声学や言語学の授業を講じている立場から見れば、容易に実感できる。そこで、日本語の音節に対する基本的な知識を述べると同時に、生徒にどの程度の知識を提供するのがよいかについて、検討していきたい。

2. 音節について

音節は母音(言語によっては母音の特徴の一部を持つ子音)を主要素として、前後に子音を伴うことがある音のまとまりを指す。音節の構造は言語によって異なるが、母音をV、子音をCと略記した場合、(C)Vと(C)VCの2つが基本的な構造となる。前者のように母音で終わるものを開音節、子音で終わるものを閉音節と呼んでいる。子音が連続して付くことができるかどうかは、言語によって異なる。

先述の教科書の説明において、日本語では基本的な音節はCVで構成されているという点には問題ない。問題

² もちろん英語力次第である。また、英語の音節が理解できないことに対する日本語の音節を理解できていないからという負の転移については、本稿では論じない。ただし、英語に限らず、子音群や閉音節を持つ言語が理解できていない生徒で、日本語の音節構造のみ(例えば4節で後述するように1音節で4モーラまで成り立つといった構造)を、的確に理解できている生徒はかなり稀少だと想像する。

となるのは、いわゆる特殊拍と呼ばれる撥音、促音、長音の扱いである。これらを単独で1音節で数えるというのは、先の定義に対してかなり無理があることになる。そこで、音の分節単位として、日本語ではポリワーフによって適用され服部四郎によって普及されたモーラという単位が必要になる。モーラについては、3節で学史をふまえて説明していく。

3. モーラおよび拍について

本節では、これまでの言語学や国語学におけるモーラおよび拍における所見を概観する³。

3.1. 音韻論的単位としてのモーラ（拍）

モーラが音韻論的単位であることは、服部四郎（1950＝1979：160）で記され、以降モーラを日本語に適用することが定着してきた。

大体短母音を含む音節に該当するところの、（中略）音韻論上の単位を *môra* と呼ぶ。*[ko:]* [*kai*] のように、長母音または二重母音を含む音節は、（中略）*2môra* に該当する。*môra* は音韻的単位であり、音節は音声的単位である。

服部説では、音声的音節と音韻的音節という2種の音節を設定し、音韻的単位として、音韻的音節以外にモーラを認めている。以下に服部四郎（1955＝1960：240）を引用する。

音韻的単位であるモーラは、必ずしも音韻的音節とは一致せず、東京方言においては、音韻的単位として、モーラの外に音節を認めるのであるということ、特に強調しておかなければならない。即ち、音韻的音節を認めたからモーラは不要になったというのではない。

音韻的音節とモーラの2種を認めた背景には、有坂秀世（1940）における「音韻論的音節」が服部説におけるモーラに相当するものであり、例えば服部四郎（1955＝1960：246）において、「甲」や「紺」が音韻的には1音節だが、モーラとしては共に2である例をあげ、一致しない両者を区別する必要があったと考えられる。また、モーラを区別することによって、東京方言の長母音における1音節か2音節かという説の対立も解消しようと説

いており、日本語の長母音は音韻的に/aa, ii, uu. .../という構造を示すので、音声上2音節にも調音されるとしている。これは、モーラによる音声・音韻的な長さの処理に関する言及である。

モーラと似て非なるものに、亀井孝創唱の「拍」がある。亀井孝における拍は、指し示す単位は結果的にモーラと同じであるが、設定根拠が異なる。亀井孝（1956＝1971：164-165）において、

二項 A と B とを仮定しよう。A と B の結合のしかたは、常に一定してゐて、AB という形でならぶことは許されても、BA という形でならぶことは許されないとする。このばあひには、A と B の関係は、A から B への移行的な連続とはみなしえても、A と B との二項の非連続的な継起としては意味を發揮しない。順列の形式として期待される相手方の BA が存在しないからである。反対に、もし、AB と BA との二つの形が許されるばあひにはこれは、A と B との継起の関係と、その逆の B と A との継起との関係が、さういふ関係として、音韻論的対立を形作ることになる。

という根拠が示され、「北」と「滝」が拍としての「キ」と「タ」との示差的対立であることが示されている。また、東京方言では、拍の内部で CV と VC との対立がないため、拍が最小の継起的な音韻論的単位であるという主張である。

柴田武（1958：38）では、音韻論的音節もモーラ（拍）も音節という名称で共有しているのはまぎらわしいと考え、

具体的に聞かれる一つ一つの音節ではなく、それらに解釈を入れて得た、音節にあたる単位を「シラビーム」と呼ぶことにしよう。phone に解釈を加えて得た単位を phoneme と言うのにならって、syllable に対して 'syllabeme' と言おうというわけである。

のように、音韻的音節をシラビームとした。音韻的音節は、音素の時系列的分布を分節する単位で、音声的音節より抽象化した概念であり、モーラとは出発点が全く異なる。

3.2. リズムの単位としてのモーラ（拍）

金田一春彦における拍が代表的な見解となる。金田一春彦（1967：75）において、

³ 福盛貴弘（2001, 2011）参照。

世界のどの言語も、リズム上の単位というものを持ち、韻文の音数律はその単位をよりどころとする。その単位を〈拍〉と呼ぶ。

と記している。また、同頁に

高低アクセントのうち、インド諸語では *mātrā* と呼ばれている単位が拍である。日本語では、古く〈もじ〉と呼ばれている単位、有坂秀世によって〈音韻論的音節〉と呼ばれている単位、服部氏によってモーラと呼ばれている単位が〈拍〉である。古代ギリシャ語では *mora* と呼ばれている単位が〈拍〉である。

と記されている。また、金田一説では、長さにも注目し、リズムの単位として、一つ一つの拍が同じ長さで調音される傾向が著しいという特徴についても言及している。

城生佰太郎 (1977: 115) では、モーラを「音韻論的に解釈した等時間的なリズムの単位」と定義している。また、同頁で

モーラは分節の単位であるシラビームとは原理を異にする概念となるので、両者を単に大小関係だけで把握するのは妥当ではないことになる。

と述べており、モーラはシラビームをさらに小さく分節した単位ではなく、金田一春彦 (1967: 76) における

〈拍〉というものはただそういうリズムの上の単位としてだけ存在するわけではない。その言語を使う一般の人たちが、漠然と、その言語の音的側面を構成している単位として意識しているものは、この〈拍〉のはずである。

と踏襲して、まず直感で区切ることができる単位としてモーラを数えられることと、音素の時系列分布に対する分節単位であるシラビームとでは、出発点が異なることを示唆していると考えられる。

3.3. モーラの普遍性と個別性

Trubetzkoy (1939) では、韻律的単位に基づき、2つの分類がなされた。1つは、最小の韻律的単位が必ずしも音節と一致せず音節より小さい単位を有する言語を「モーラ（を数える）言語」、それに対立するもう1つは韻律的

単位が音節と常に一致する「音節（を数える）言語」である。換言すれば、モーラを数える必要がある言語とそうでない言語に大別したのである。モーラ言語には日本語やラテン語など、音節言語には英語、ドイツ語、ロシア語などが属するとされた。

近年の音韻論では、音節より小さい単位としてモーラを仮定して、モーラを日本語だけでなく音節言語と呼ばれる英語やドイツ語などの言語にも適用し、様々な言語に適用できる普遍的な単位であると考えられる立場がある。具体的には、音節頭子音群は0、短母音は1、長母音や二重母音は2、音節末子音群は1として数える。例えば、*the* は1モーラ、*cat* は *ca* と *t* で2モーラ、*sea* は長母音を含むので2モーラといったようにである。このように音節を数える言語とされている言語でもモーラを適用できる点をふまえ、窪菌晴夫 (1998) では、トゥルベツコイの二分法は誤りであると指摘しているが、この指摘は必ずしも妥当ではない。それは、音韻理論においてより小さな単位に分析できることと、母語話者の直感でおのずとそれがあつと捉えられることとは次元が違っているからである。この点において、モーラの普遍性を論ずると同時に、個別性に注意を払わなければならない。上野善道 (2001) では、日本語、英語、ラテン語にモーラを適用している研究はあるが、そこで用いられているモーラに差異があることが指摘されている。日本語のモーラは音韻論的等時性を要求するが、英語のモーラはそれを要求しない。例えば、日本語であれば、「キャット」という場合、「キャ」「ッ」「ト」はほぼ同じ時間であると母語話者は感じることができる。しかし、英語の「*cat*」については、直感的に「*ca*」「*t*」を分けることもなければ、それらが同じ時間で発せられているとも感じない。音節より小さい単位ということで理論的に適用したとしても、母語話者が直感的に分節できるかどうか、ならびに等時性を有した実体を直感的に感じとれるかどうかという点において、日本語と英語のモーラを同様にとらえることはできない。

トゥルベツコイの二分法が誤りと考えてしまう要因は、モーラに対して、3.1節で述べた所見と3.2節で述べた所見を混同してしまっているからである。結果として、妥当ではない結論を導き出してしまっている。トゥルベツコイが示唆する区分は、金田一春彦説が最も近いと考えられる。モーラを数える言語という考え方には、直感的に分けることができるという面が重視されており、理論的に更なる分析を加えるためにという視点がそもそもの出発点ではないからである。したがって、城生佰太郎説

によって、大小関係で把握するのは妥当ではないと指摘しているのは一理あるといえる。なお、日本語にモーラを適用することになった元になるラテン語では1音節に対し1~2モーラしか数えないが、日本語は1音節に対し1~4モーラを数えることができる点で、違いがある。この点については、次節で日本語について具体的に示すことにする。

4. 日本語の音素配列と分節単位

日本語の音素配列については、以下の通りになる。音節を構成するためには、V₁が必須の要素で、それ以外については任意の要素となる。

C₁ C₂ V₁ V₂ C₃ C₄

C₁: すべての子音

C₂: 拗音を形成するための/j, w/⁴

V₁: すべての母音

V₂: 長音/R/を形成するためのV₁と同じ母音⁵

C₃: 撥音/N/

C₄: 促音/q/

具体的には、以下のように必須となる母音V₁に組み合わせさせた形となる。

か、サ、田 C₁V₁

きや、茶 C₁C₂V₁

あ、イ、尾 V₁

ああ、王 V₁V₂

あん、円 V₁C₃

あっ、おっ V₁C₄

そして、実際にはさまざまな組み合わせが成り立って

⁴ この位置の/w/は合拗音であるため、現代日本語の共通語としては不要だが、古文では必要になるため入れておいた。

⁵ 音韻論的には、この位置に二重母音/i/も入りうる。ただし、音韻論的に日本語の二重母音を明確に説明できた例がない。「司会」の/kai/と「歯科医」の/kai/を比べて、後者は/ka/と/i/の間に形態素境界があるから二重母音にはならないとは言えるが、前者が二重母音であるかどうかは発音上での個人差がある。また、「赤い」の/kai/が「ケー」/keR/になることは受け入れられやすいが、「貝」の/kai/が「ケー」/keR/になることは受け入れられにくい。「やばい」と「倍」なら、なおさらそうである。こういった点をふまえて、二重母音を含めてしまうことで生徒が音節数を数える際に混乱が生じることを想定すれば、国語科教育では不要だと判断した。

いる。

きゃー、秒 C₁C₂V₁V₂

きゅん、純 C₁C₂V₁C₃

きゃーっ C₁C₂V₁V₂C₄

シーン C₁V₁V₂C₃

チャーんっ C₁C₂V₁V₂C₃C₄

ここまで示してきた組み合わせが、全て1音節となる。日本語の音節は、CVを基本としていることは確かだが、撥音や促音を伴うCVCといった構成があることを確認しておく必要がある。この点をふまえていなければ、外国語と比べて音節について説明する際に、話が合わないのである。これが、国語科教科書においては明らかに漏れている点である。その結果、英語にはCVもCVCもあるが、日本語にはCVCがないため、英語の発音が上手くならないという安易な結びつけに陥りかねない。日本語にはCVCがないわけではなく、あるけれども限られているから注意を払う必要があるということを理解できればいいのである。

では、モーラ（拍）についてはどうなるかという、V₁の後には全てがモーラをなすための単位となっているので、以下のような境界表示ができる。

C₁ C₂ V₁ / V₂ / C₃ / C₄

したがって、「か」や「田」は1音節1モーラ、「王」や「パン」は1音節2モーラ、「シーン」は1音節3モーラ、「チャーんっ」は1音節4モーラということになる。

5. 文字で数えることの問題点

短歌や和歌に対する^{みそひと}三十一文字や字余り、字足らずなど、定型の韻文に対して音数律ではなく文字で数えることが国語科教育では定番化している。もちろん、用語の先取性は尊重すべきであるため、それ自体を批判することが目的ではない。ただ、その結果として、文字を数えるけれども、音節や拍を数えるという感覚が薄れていることに危惧を感じるのである。

それは、子どもの遊びにもみられる。たとえば、じゃんけんをして、勝った手の形に関連することばにしたがって、その歩数だけ進む、あるいは段数だけ上り下りするといった遊びがある。この遊びでは、グーで勝った場合は「グリコ」、チョキで勝った場合は「チョコレート」、パーで勝った場合は「パイナップル」を基準とするのだ

が、文字数を基準とするため、グリコは 3、チョコレートは 6、パイナップルは 6 というようになる。口に出す際にも 1 文字ずつ区切って、「グ・リ・コ」「チ・ヨ・コ・レ・エ・ト」⁶「パ・イ・ナ・ツ・プ・ル」のように文字そのものを言う。この遊びが、じゃんけんで勝つ確率に対して、それぞれの数を均等にしない方が面白味を増すとされている⁷。「グリコ」は 3 音節 3 モーラ、「チョコレート」は 4 音節 5 モーラ、「パイナップル」は 5 音節 6 モーラであるため、仮に音節で数えてもモーラで数えても、何で勝つかで歩数が変わる。

音節は音素配列における構造で定まるもので、主に CV に対してかな文字を充てるといふ音節文字であっても、文字で音の分節単位を捉えることは適切ではない。先のじゃんけん遊びの例であれば、長音や促音といった特殊拍は 1 モーラとして捉えられているが、拗音は 1 音節 1 モーラであるのに、2 字という分節が優先されてしまっている。この点は、音節や拍を直感的に捉えられていないというように見受けられ、望ましくないと考えられる。

特殊拍と呼ばれる撥音、長音、促音に対して、文字 1 字が 1 音節に相当するというのはそもそも誤りである。また、促音「っ」が 1 モーラに相当するというのは文字体系から考えると異論がある。拗音の表記における「ゃ、ゅ、ょ」や外来語音表記における「あ、い、う、え、お」は前接する文字に付属して 1 音節 1 モーラをなす。この点から見れば、小さく表記される文字は大きく表記される文字とセットで 1 モーラというのが基本と捉える方が整合性がある。小さい文字による表記である促音の「っ」は、小さい文字で表記するものの中では例外的に 1 文字で 1 モーラをなすとみなしておいたほうがよい。そして、小さい文字は前接の音にくっついて 1 音節をなすという共通要素を意識させることが、音節の的確な理解につながりうると考えられる。

⁶ 「チ・ヨ・コ・レ・イ・ト」と発音する者もいるようである。なお、地域差か個人差かは定かではない。

⁷ 文字で数えた場合、何歩進めるかという期待値は、チョコキとパーでは $6 \times 1/3 = 2$ で、グーは $3 \times 1/3 = 1$ となり、最善手がチョコキとパーの両方になってしまう。これがモーラならば、パーは $6 \times 1/3 = 2$ 、チョコキは $5 \times 1/3 = 1.6$ 、グーは $3 \times 1/3 = 1$ となり、複数の手で期待値が一致することはない。あとは心理戦となり、毎回のじゃんけんが独立した関係ではなくなるので、確率通りの結果にはならなくなる。また、モーラで数えれば全ての手で進める歩数が変わるため、より複雑化して展開が予想しにくくなる。

6. 音節を的確に意識させるための方略—音節しりとり—

モーラについては、手を叩いて数えるという音楽科における手法が、日本人向けの幼児・児童教育だけでなく、外国人向けの日本語教育においても援用されている。このやり方については、「日本^{にっぽん}」を「ニッ・ポン」のように 2 回叩くか、「ニ・ッ・ポ・ン」のように 4 回叩くかで、前者は音節を意識している、後者はモーラを意識していると解釈されている。これを利用して、幼児が音節やモーラをどのように獲得しているかを考察した研究はあるが、これは表面的な結果が分かるだけで、それ以上のことは分からないため、その是非についてはここではふれないでおく⁸。他に問題点を挙げるなら、福盛貴弘(2010)で指摘されるように、「パンダ」に対して 1 回しか手を叩かなかった場合、他と併せてどう整合性をつけて説明するかが解明されにくいという点がある。

また、音楽科で用いられる拍は、一定間隔で現れるカウントに対する単位である。したがって、言語の拍とは必ずしも一致しない。音楽科の拍はビートであり、言語学の拍はモーラであり、両者は同じ訳語であるが、性質を異にするものであるからである。したがって、音符の 1 拍に対して、言語の 1 音節が充てられても 1 モーラが充てられても、かまわない。ただし、この方法は、普段から閉音節を意識していない母語話者が閉音節を 1 拍(ビート)として捉えるために、あるいは普段からモーラを意識していない母語話者が特殊拍を 1 拍(ビート)として捉えるためには有益な方略であるため、前者は主に英語教育で、後者は主に日本語教育で用いられている。こういった外国語教育の観点を母語教育に持ち込むことで、自身の母語の特徴に気づかせる契機となりうると考えられる。

手を叩く方略については、教育に関わる多くの研究や実践で成果が示されており、枚挙にいとまがないので、

⁸ 脳内言語処理は、本人が自覚的に理解できているかにかかわらず行なわれるものである。手を叩いて、音節かモーラかを区別する際に、聞かれた側は相手の意図やルールを読みとって答えている、例えば「大人はこう叩けば正しいって褒めてくれるんだろうな」といった可能性がある。例えば、「りんご」に対して 3 回手を叩いたらモーラを獲得していることは分かるけれども、音節を獲得していないとは言えない。そういった不確実な調査での確認より、教育によって理屈で自覚できる生徒を増やす方が、音節についての的確な理解につながると考える。ただし、このように理屈で理解するというのは、教科書の記述に合わせて、中学校 1 年生以上が妥当だと思っている。

本稿ではその是非は論じない⁹。本節では、ことばそのものによる方略を提案してみたい。それは、「音節しりとり」である¹⁰。

しりとりは、語彙や知識の量が問われるので、国語力を発揮できることば遊びだと考えられる。ただし、現行のしりとりが文字中心で成り立っていることが気になっている。濁音や半濁音はその濁点や半濁点を取った音でもかまわない、拗音は「や・ゆ・よ」とする、長音は最後の母音かその直前の文字かどちらかを選ぶといったルールは、文字を基準にしているからこそ生まれるわけである。濁音については、有声音を無声音にしてもかまわないというように置き替えると、それが不可思議であることは一目瞭然である。半濁音にいたっては、半濁点を取ることで破裂音から摩擦音に変えてよいということになり、さらに不可思議である。拗音はそれ自体で1音節1モーラをなしているのに、あえて文字1字を取り出すことで拗音が粗末に扱われてしまっている。長音については、なぜ直前の文字であってもいいのか、明白な理由が分からない。こういった点を、音節しりとりで解消しようというのである。

音節しりとりの場合、「ん」で終わる言葉を言ったら負けというルールがなくなる。例えば、「しけん→けんか」といったように、撥音を含む音節で次の人は答えればよいからである。このように音を重視するため、以下のルールも付け加えておきたい。「ヴ」の表記で終わる語（例えば、グルーヴ、クリスマスイヴなど¹¹）は、「ぶ」に置き替えてもかまわない。これは、日本語の外来語音と

して、表記としては「ヴ」を用いても、発音として[v]を用いるのは自然でないからである。そして、濁点外しによる「う」は認めない¹²。同様に「を」の表記で終わる語（例えば、さいとうたかを、ほしにねがいを など）については、共通語では「を」を[wo]とは発音しないので、「お」に置き替えてかまわない。また、「こんにちは」は表記上は「は」で終わるが、音声としては[wa]で終わるので、次の人は「わ」で始まる言葉を言わなければならない。最後に、表記ではなく発音した音声を基にするので、「ドア」を「ドアー」と発音した場合には、次の人は「アー」で始まる言葉を言わなければならない点も加えたい。逆に「コンピューター」ではなく「コンピュータ」と言った場合には、「タ」で始めることにする。なお、「ん」で終わる言葉を言ったら負けといったルールがなくなるので、いつまでも終わらないということが起こりかねない。この点については、将棋の対局のようにそれぞれに持ち時間を設けて、その持ち時間を使いきったら負けというルールにすればよい。

以下に、実際に試してみた音節しりとりでの実例をいくつか例示しておく¹³。

にほんしゅ→しゅわ
しけん→けんか
とけい→けいすう→すうがく
とうきょう→きょうと
くじょう→じょうぶ
ドアー→アーチ
ルイボスティ→ティーシャツ
ムーン→ムーンライト

持ち時間を設ければ、必ず終わりを迎えるので、子どもだけでなく大人でも遊べるものになる。さらに難易度

⁹ 国語科と音楽科でのリズムの扱いの違いについては、桐越舞（2018）に小学校の教科書における記述が説明されているので、詳細はそちらに委ねたい。

¹⁰ 音節しりとりの着想自体は、筆者が大学生の頃（1990年代前半）から持っていたものである。ただ、大学生になってルールを改変したしりとりにつき合ってくれる人がほとんどいなかったため、私個人の影響力の無さも加わり、普及させるには至らなかった。なお、同様の案を考えている人が他にもいるとは思いますが、詳しく調査はしていない。

¹¹ 「ヴ」は[v]に対する外来語音表記として一部使われているものの、発音を変えてしまうまでには至らなかった。その点では、「ティ」や「フュ」とは性質が異なる。また、2019年4月1日以降、在外公館名称位置給与法改正によって、公文書における国名に対する「ヴ」は消えることになった。福盛貴弘（2010）では、「ヴ」はそれを使った方がすっきりするという人の好みによる表記と指摘されている。こういった不安定なゆれがあるという現状をふまえると、筆者は日本語の表記として「ヴ」は必要ない表記と考えており、音節しりとりにもその旨を反映させている。

¹² va に対する表記として「ヴァ」があるが、原音ではむしろ「ワ」で発音されている言語もある。この点をふまえた「ワ」に対しても、日本語でのしりとりという性質を重視して、置き換えを認めないことにする。表記上、「ヴァ、ヴィ、ヴ、ヴェ、ヴォ」で終わるものは、「ば、び、ぶ、べ、ぼ」への置き換えのみを認めることにする。¹³ 本文での例は試している時であったため、メモのみの記録であったが、その後デモ動画を公開したので、リンク先とQRコードを示しておく。

<https://youtu.be/buOEFazt5nY>



を上げようとしたいなら、QuizKnock の限界しりとり¹⁴のルールを加えることを勧める。限界しりとりでは、次という人の言葉の文字数が指定されるので、単純に該当する文字で始まる言葉を言えばいいというわけではない。「ゴリラ」の次の人に「7」という指定が加えられるので、その際には「ら」で始まる7文字の単語（例えば、ラグビーボール、らいじょうしゃ など）で答えなければならないというものである。すでに人気を博しており、この遊び方を楽しんでいる者は多い。ただ、本稿の視点では、文字数という制約が引っ掛かるので、これをモーラ数という制約に置き替えていただきたい。そうすれば、語頭は音節で考え、語形はモーラを数えるといったように、音節とモーラを同時に意識することができる遊びになるのである。例えば、「キャイン」の後に「5」という指定が加われば、「いいんかい」と続けるといったようになる。

7. 結語

本稿では、日本語母語話者はモーラ感覚を備えているが、それを音節という用語で習ってしまうせいで、音節に対する的確に理解できていないという問題点をとりあげた。そして、モーラ（拍）については音楽科で、音節（特に閉音節）については英語科でそれぞれ学んでいることも指摘した。両科目で学ぶことに問題があるわけではなく、むしろ望ましいことであると考えられる。ただ、そういった多面的な方略で生徒は学んでいるというのに、肝心の母語教育で音節についての的確な説明がなされていないことに問題があるのである。この問題点を解消するには、まずは日本語の音素配列と分節単位の関係性を平易に説明しておくことが重要である。そして、理解を促進するために、日本語の音素配列に沿って、拗音や外来語音（ティ、シェ、フユなど）も含めた拡大五十音図を作成させることは一つの方略になると考えられる。それは、拗音や外来語音は2字で表記されるが、拡大五十音図という音節表の中で位置づけることで、1音節1モーラをなす音が視覚的にも理解できるからである。そして、特殊拍を含めて音節をなすということを理解できていれば、他言語と接しても日本語だけが特殊だという幻想に悩ま

¹⁴ 限界しりとりは、

<https://www.youtube.com/watch?v=fHYKnaoWsoY>

（2017/5/20 公開）などで何度も取りあげられている、QuizKnock によって生み出されたしりとりである。アプリ「限界しりとり Mobile」やカードゲーム「限界しりとりパーティー！」が販売されており、様々なチャンネルでこれらを用いて遊んでいる様子が公開されている。

されなくてすむはずである。今後、国語教科書の更なる改訂が望まれる。

最後に、音節しりとりでは促音を扱えない問題点についてふれておく。基本的に促音で終わる自立語はないため、音節しりとりで促音に注意を払うことはほとんどない。この点を解消するためには、難易度は格段に上がるが、後ろから2モーラ目を含む音節でしりとりを行えばよい。例えば、「ゴリラ」なら「リ」、「しょうぎょう」なら「ぎょう」、「デパート」なら「パー」、「カウント」なら「ウン」、「せんたつき」なら「たっ」、「としいいん」なら「いいん」で始めるといったようになる¹⁵。ある程度の年齢に達するとしりとりがばかばかしく思えてしまうかもしれないが、限界しりとりを見ていると、大人でも楽しめるルールさえあれば、しりとりには限界はないと感じている。音節しりとりもその一翼を担えば幸いである。

<付記>

本稿は、本学外国語学部日本語学科で開講している「音声学」「言語学概論」、本学外国語学研究所日本語文化学専攻で開講している「応用日本語学特殊研究Ⅱ」で講じている内容をもとに執筆している。

【参考文献】

- 有坂秀世（1940）『音韻論』三省堂
 上野善道（2001）「日本語のモーラ、ラテン語のモーラ、英語のモーラ」『国語研究』64：8-16.
 亀井孝（1956）「音韻」の概念は日本語に有用なりや」『国文学攷』15：1-11.（『日本語学のために亀井孝論文集』（1971）吉川弘文館 161-177 所収）
 桐越舞（2018）「国語教育と音楽教育のリズム」『教職課程センター紀要』3：135-144.
 金田一春彦（1967）『日本語音韻の研究』東京堂出版
 窪菌晴夫（1998）「モーラと音節の普遍性」『音声研究』2（1）：5-15.
 柴田武（1958）「音声」『国語教育のための国語講座2 音声の理論と教育』朝倉書店 1-46.
 城生佰太郎（1977）「現代日本語の音韻」、大野晋・柴田武編『岩波講座日本語5 音韻』岩波書店 107-145.

¹⁵ 音節しりとりでも「ル攻め」は有効だが、それ以上にCVVNの類で攻めると勝ちやすい。この構造のみ長母音を短母音にしてもよい、たとえば「シーン」は「シン」でも可ぐらいのルールの緩さはあってもいい気がしている。

- 服部四郎 (1950) 「国語の音韻体系」(『新版音韻論と正書法』(1979) 大修館書店 119-200 所収)
- 服部四郎 (1955) 「音韻論から見た国語のアクセント」『国語研究』2 : 2-50. (『言語学の方法』(1960) 岩波書店 240-275 所収)
- 福盛貴弘 (2001) 「モーラと実験音声学」城生佰太郎編『コンピュータ音声学』おうふう 151-205.
- 福盛貴弘 (2010) 『基礎からの日本語音声学』東京堂出版
- 福盛貴弘 (2011) 「モーラ」城生佰太郎・福盛貴弘・斎藤純男編『音声学基本事典』勉誠出版 395-402.
- 堀畑正臣 (2016) 「中学校1年生教科書における「音節」の項目について」『国語国文研究と教育』54 : 82-90.
- Trubetzkoy, N. S. (1939) *Grundzüge der Phonologie*. Göttingen: Vandenhoeck & Ruprecht. (トウルベツコイ著、長嶋善郎訳 (1980) 『音韻論の原理』岩波書店)